

源氏物語と古事記神話(二)

杉浦 一雄

目次

- 五 鬚黒大将と大国主神——葦原色許男神——
- 六 北の方と八上比売
- 七 火難との遭遇

五 鬚黒大将と大国主神——葦原色許男神——

③男主人公の容姿がいずれも並以上なのに、特異な容姿として扱われている点。

『源氏物語』に登場する鬚黒大将が『古事記』神話における大国主神をモデルとしていることは、武器と関わりをもつというだけでなく、特異な容姿として扱われている点からも窺い知ることができるのではなからうか。

大原野の行幸のおり、鬚黒大将をはじめて目にした玉鬘は次のような感慨をいだいている。

色黒く鬚がちに見えて、いと心づきなし。

(『源氏物語』「行幸」の巻、二九二頁)

〔現代語訳〕色が黒く顔じゅう鬚だらけといった感じで、とても好きにはなれない。

はじめて大将の容姿を目にした玉鬘は、色が黒く顔中鬚だらけといった感じでとても好きにはなれないと不快なまでの感想をいだいているのである。この記述により、後世、この人物は「鬚黒」の名をもって呼ばれることになるのだが、その容姿はきわめて特徴的だったということができよう。

美形ぞろいの『源氏物語』にあつて、鬚黒大将がきわめて特異な容姿に設定されているのは、一体何に基づくのであろうか。

金田元彦氏は、鬚黒と玉鬘のモデルとして平安朝に実在した平高棟(八〇四—八六七)と妻の藤原有子の名を挙げている。氏は、平高棟について記された『日本三代実録』巻十四、貞観九(八六七)年五月十九日条「高棟は桓武天皇の孫にして、一品葛原親王の長子なり。高棟は長六尺、鬚髯美しかりき。幼にして聰悟、好みて書伝を読みき。(中略)子男十七人有り」を掲げ、平高棟が「鬚髯美しかりき」とある点などを重視して次のように結論された。

堂々とした偉丈夫で、見るからに鬚髯の美しく、子沢山の点は、「髭黒の大将」の面影を写している。美貌の女性とひげ男の結婚という源氏物語の筋書きは、「日本紀の局」と呼ばれた紫式部によって、「三代実録」に収められている古い物語を再話した可能性が強いのである。

(金田元彦『源氏物語私記』)(1)

たしかに鬚髯が特徴的な点については共通性を認めてもよいとは思いますが、だからと言って、この一事を根拠に『源氏物

語』が『日本三代実録』の記事を「再話」したとまでは言い難いように思われる。

それならば、鬚黒大将に施された特異な容姿という人物造型は、一体何を淵源として設定されたのであろうか。実は、ここにも『古事記』の神話が大きく関与しているように思われるのである。

既に述べたように、『古事記』の神話をみてみると、鬚黒大将のモデルである大国主の神名には複数の別名が伝えられている。

大国主神おほくにぬしのかみ。亦の名は、大穴牟遲神おほあなむぢのかみと謂ひ、亦の名は、葦原色許男神あしはらしこをのかみと謂ひ、亦の名は、八千矛神やちほこのかみと謂ひ、亦の名は、宇都志国玉神うつしくにたまのかみと謂ひ、并せて五つの名有り。

〔古事記〕上巻「天照大御神と須佐之男命」、七五頁）

〔現代語訳〕大国主神おほくにぬしのかみ。またの名は、大穴牟遲神おほあなむぢのかみといい、またの名は、葦原色許男神あしはらしこをのかみといい、またの名は、八千矛神やちほこのかみといい、またの名は、宇都志国玉神うつしくにたまのかみといい、合せて五つの名がある。

このなかに「葦原色許男神」という呼称がある。この呼称こそ、鬚黒大将に施された特異な容姿の淵源なのではないか。では、「葦原色許男神」とは一体どのような神名なのであるうか。

「葦原色許男神」の「色許」をめぐっては、その解釈が「勇猛説」と「醜惡説」とに大別されている。本居宣長は『古事記伝』のなかで次のように述べた。

色許シホコは醜シコと書て、前に志許シホコ米志許シホコ米伎シホコ、とありし処に

云る如く、多くは悪アクみ罵ノリて云言コトなれども、此の御名は、勇猛ユウメイを美ミて云り、さて其も、人の畏カシみ懼オソる、方より云れば、彼醜シコ女メなどと、云もてゆけば同意オウイに帰カり、

〔本居宣長『古事記伝』九之巻、神代七之巻〕(2)

つまり、宣長は、「葦原色許男神」の「色許」は「勇猛タケケキを美ホメて云イハつたもの」として、「勇猛説」を展開した。これに倣なつて、多くの注釈書が「勇猛説」を採用することとなったのである。しかしながら、ここで問題なのは、『古事記』に登場する「葦原色許男神」の「色許」がいずれの意味を有しているかではなく、『源氏物語』における鬚黒大将がどちらの解釈を踏まえたうえで造型されているかということであろう。

そのように考えて、『源氏物語』「行幸」の巻の鬚黒に「勇猛説」をあてはめてみると、ここではそぐわないように思われる。鬚黒をはじめて目にした玉鬘タマカミが「色黒く鬚がちに見えて、いと心づきなし」と明らかに負の評価を下したのは、鬚黒を「勇猛」とみたからではなく、むしろ「醜惡」と受け取ったからにはかならない。ということは、『源氏物語』の鬚黒の場合、「色許」に「醜惡説」を適用した方がより穏当だということになりそうである。

ちなみに、辞書的な意味においても、「しこ」は「けがらわしく、うとましいさま」(『時代別国語大辞典』上代編)(3)、「醜惡なものや愚鈍なものを憎みののしつていう語」(『古語大辞典』(4)、「醜惡なこと。けがらわしいこと」(『日本国語大辞典』第二版)(5)とあり、「しこ」は、「醜い男」(『古語大辞典』(6)「みにくい男」(『日本国語大辞典』第二版)(7)を指すとある。

そこで、「葦原色許男」は、「葦原の中つ国(天下)第一の醜シコ

男」(倉野憲司『古事記全註釈』(8)あるいは「地上の現実の国にいる醜い男」(西宮一民校注『古事記』(9)の意味になるであろう。

すなわち、『源氏物語』に登場する鬚黒大将がきわめて特異な容姿に設定されているのは、モデルとなった大國主神が『古事記』神話のなかで「葦原色許男神」と呼ばれていたことに由来していたからとみてよいのではなからうか。

けれども、『源氏物語』が『古事記』の神話を踏まえているのはこれだけにとどまらない。「醜悪」と扱われた容姿が実際には並以上であったという設定もまた『古事記』神話に依拠していると思われるのである。

『源氏物語』のなかで鬚黒が玉鬘から「いと心づきなし」と切り捨てられたのは事実であるが、実際の鬚黒は「醜悪」と呼ぶほど劣悪な容姿ではなかったのではないかと思われる。それというのも、『源氏物語』のなかには、実際の鬚黒がそれらの散見されるからである。

たとえば、「真木柱」の巻には、玉鬘を手に入れた鬚黒大将が玉鬘のもとへ出かけようとその支度にいそしむさまが次のように描写されている。

なつかしきほどに萎えたる御装束に、容貌も、かの並びなき御光にこそ圧さるれど、いとあざやかに男々しきさまして、ただ人と見えず、心恥づかしげなり。

(「真木柱」の巻、三六四―三六五頁)

〔現代語訳〕着心地もほどよい御装束をお召しになつていと、顔かたちも、あの並ぶ者のない源氏の大官のお美しき

には及ぶべくもないが、まことにすつきりと男らしい風姿で、並々の人ともみえず、誰しも気おくれをおぼえるくらいのご様子である。

これによれば、鬚黒の顔かたちは、さすがに光源氏の美しさには及ぶべくもないものの、「まことにすつきりと男らしい風姿」で並々の人ともみえず、「誰しも気おくれをおぼえるくらいのご様子」だったというのである。

さらには、次のような記述もある。

よき表の御衣、柳の下襲、青鈍の綺の指貫着たまひてひきつろひたまへる、いとものものし。などかは似げなからぬと人々は見たてまつる……。

(『源氏物語』「真木柱」の巻、三七七頁)

〔現代語訳〕立派な袍に、柳の下襲、青鈍色の薄織物の指貫をお召しになり身づくろいなさった大将のお姿は、まことに堂々たるものである。これなら本当に女君とお似合いだと女房たちはお見受け申している……。

これによれば、鬚黒大将はまことに堂々たる姿をし、誰もが玉鬘と「お似合いだ」と見ていることがわかる。つまり、鬚黒は第三者の眼から見ても玉鬘と好一对だったというのである。

ということとは、実際の鬚黒は容貌がはなはだしく劣っていたという訳ではなく、むしろ誰もが気おくれを覚えるくらいの器量であって、少なくとも「醜男」と呼ばれるほど劣悪な容姿ではなかったとみてよいのではないか。鬚黒をはじめて目にした玉鬘が「いと心づきなし」という感想をいだいたのは、その容姿が劣悪だったからというよりは、率直に、好き

にはなれないという個人的な感想をそのまま吐露したからではないのか。このときの玉鬘には、鬚黒の威圧的な武人の姿に、ほんの前年、筑紫で執拗に言い寄られた武士、大夫監の悪夢がちらついていたのかも知れない。

それはともかく、はじめて鬚黒を見て「いと心づきなし」と負の感想をいだいた玉鬘に対して、『源氏物語』の作者は容赦ない反論を展開している。

いかでかはつくりひたてたる顔の色あひには似たらむ、いとわりなきことを、若き御心地には見おとしたまうてけり。

（『源氏物語』「行幸」の巻、二九二頁）

〔現代語訳〕 いったいどうして男の顔というものが女の化粧をこらした顔の色合いに似るわけがあるう、じっさい無理な注文であるのに、若い姫君の心地には大将をお見下しになるのであった。

『源氏物語』の作者は、鬚黒を見下した玉鬘のあけすけな批評に対して、若さゆえの「無理な注文」だと釘を刺すことを忘れないのである。

このように、鬚黒があたかも「醜男」であるかのように扱われながらも、実際にはむしろ並以上に立派だったという『源氏物語』の設定は、実は『古事記』の神話に淵源を見出すことができるのである。

『古事記』の神話をみてみると、「葦原色許男」と呼ばれた大国主神が「美しい」とも評されていることがわかる。

詔命の随に、須佐之男命の御所に参る到りしかば、其の

女須勢理毘売出で見て、目合為て、相婚ひき。還り入りて、其の父に白して言ひしく、「甚麗しき神、来たり」といひき。爾くして、其の大神、出で見て告らししく、「此は、葦原色許男命と謂ふぞ」とのらして……。

（『古事記』上卷「大国主神」八一頁）

〔現代語訳〕 詔命に従い、須佐之男命のみもとに参り着いたところ、その娘の須勢理毘売が出てきて大穴牟遲神を見て、目配せして、結婚した。須勢理毘売は家の中に帰り入って、その父に「たいへん立派な神が来ました」と申し上げた。そこで、その大神が出てきて大穴牟遲神を見て、「これは葦原色許男命という者だ」と仰せられ……。

これによれば、大国主神が「甚麗しき神」とも「葦原色許男命」とも呼ばれていることがわかる。つまり、同じ大国主神が「美しい」とも「醜い」とも両極端に表現されているのである。

「天下第一の醜男」と呼ばれた大国主神は、実際には「美しい」と評されるほどの美形であったかも知れない。『古事記』には、大国主を「美しい」と表現した部分がもう一箇所ある。

八十神たちに騙され、焼けた石をかかえたまま死んでしまった大国主神を再生させる場面で『古事記』は次のように記している。

蛭貝比売きさげ集めて、蛤貝比売待ち承けて、母の乳汁を塗りしかば、麗しき丈夫と成りて、出で遊び行きき。

（『古事記』上卷「大国主神」、七九頁）

〔現代語訳〕 蛭貝比売が石に張り付いた大穴牟遲神の身体

をこそげ集め、蛤貝比売が待っていて受け取り、母親の乳を塗ったところ、立派な青年になって、出歩いたのであった。

これによれば、大国主神は再生を果たし、元通りの「麗うるはしき丈夫をとこ」(麗丈夫)となって出歩いたというのである。「麗」の字は、「うるわしい」(『大漢語林』⁽¹⁰⁾)と訓み、「うるわしい」とは、「人の美しく立派なのをほめていう。立派だ。すぐれて美しい。輝くばかり美しい」(『日本国語大辞典』第二版)⁽¹¹⁾の意だとすれば、「葦原色許男」と異名をとった大国主は、もともと劣悪な容姿などではなく、むしろ「麗しい」と呼んでよいような美形だったと考えるのもよいのではないか。だからこそ、大国主をはじめて目にした須勢理毘売が一瞬で恋に落ち、結婚の契りを結んだのかも知れない。

このように考えれば、玉鬘によって「いと心づきななし」と嫌われた鬚黒大將が、実際にはそれほどひどい「醜男」ではなく、むしろ並以上の立派な容姿だったという設定は、大国主神が「葦原色許男」すなわち「天下第一の醜男」と蔑称されながらも、実際には「麗しく」すぐれた容姿だったという『古事記』の神話を忠実に踏まえたいうえで施された設定だったということができるのではなからうか。

すなわち、男主人公の容姿がいずれも並以上なのに、特異な容姿として扱われているという点からみても、鬚黒大將が大国主神をモデルとしていることが知られるのである。

六 北の方と八上比売

④男主人公にはいずれにもすでに妻子があり、その妻が常人とは異なる精神状態にある点。

『源氏物語』に登場する玉鬘が『古事記』神話における須勢

理毘売をモデルとし、玉鬘の夫となった鬚黒大將が大国主神をモデルとしているとするならば、鬚黒の正妻北の方は、一体誰をモデルとして造型されたのであろうか。

「真木柱」の巻の冒頭において、玉鬘が並み居る懸想人たちのなかから鬚黒の手に落ちたことが明かされる。鬚黒は歓喜にむせぶが、玉鬘との同居を願う鬚黒には大きな障害が立ちはだかっていた。それは北の方の存在である。実は、鬚黒にはすでにれっきとした正妻北の方がおり、北の方との間には真木柱をはじめとする三人の子どもたちまでいたのである。

結婚相手となる男主人公にすでに妻子が存在していたという物語の設定は、どこから来たのか。やはりここにも、『古事記』の神話が大きく関与していたと考えられるのである。

大国主と須勢理毘売とが運命的な出会いを果たす以前に、大国主と関わりがあった女性といえば、稲羽いなほの八上比売やかみひめを描いてほかにない。ということは、鬚黒北の方のモデルは稲羽の八上比売だったと考えるのではなからうか。

『古事記』の神話によれば、大国主の名がはじめて紹介された直後、つづく「八上比売求婚譚」のなかで大国主の活動が語られている。

八十神たちが大挙して稲羽の八上比売のもとへ求婚に出かけた際、大国主は袋を背負わされ、八十神たちの従者としてつき従うことになったのだ。ところが、八十神たちは八上比売から結婚の申し入れをことごとく断わられただけでなく、あとからやってくる大国主と結婚しますと宣言されたために激怒、大国主は八十神たちから命を狙われることになり、二度にわたって殺される破目となった。大国主はその都度復活を果たしたものの、このままでは本当に滅ぼされかねないと、須佐之男命を頼って根之堅州国へ避難することとなっ

た。こうして大国主は根之堅州国を訪れることとなり、それによって須勢理毘売と運命的な出会いを果たすこととなったのである。

すなわち、元をただせば大国主が須勢理毘売と出会うこととなったそもそのきつかけは、八十神たちが大挙して稲羽の八上比売のもとへ求婚に出かけたことにある。つまり、大国主が須勢理毘売と結ばれることになった（根之堅州国訪問譚）は、八十神たちによる（八上比売求婚譚）の途上において展開されているのである。

その証拠に、『古事記』の神話は、大国主が根之堅州国からの脱出を成し遂げ、「始めて国を作りき」と記したのちに、あたかも八十神たちによる（八上比売求婚譚）に結末をつけるかのように八上比売の消息について言及する。

故、其の八上比売は、先の期の如くみとあたはしつ。

（『古事記』上巻、八五頁）

〔現代語訳〕さて、あの八上比売は、先の約束のとおり大穴牟遲神と結婚なさった。

すなわち、八上比売は「大穴牟遲神と結婚します」と宣言した、その先の言葉の通り大国主と結ばれ、子宝にも恵まれたというのである。八上比売がいつ大国主と結婚し、いつの間に子どもまでもうけていたのかは不明であるが、少なくともこの記述によれば、大国主が須勢理毘売を妻にしようとしていた段階で、大国主にはすでに八上比売というれっきとした妻がいたことになるのである。

『源氏物語』の作者は、こうした『古事記』神話の記述を忠実に踏まえただけで、鬚黒大将にはすでに妻がおり、子ども

がいるという設定を施したのではないか。つまり、鬚黒大将が玉鬘と結ばれる以前に妻子が存在していたという『源氏物語』の設定は、『古事記』神話の記述を基に着想されたものだということができるのである。

では、『源氏物語』における鬚黒北の方と『古事記』における稲羽の八上比売との間にはどのような共通点が見出せるのであるうか。それは、いずれの妻も常人とは異なる精神状態にあった点である。

鬚黒北の方は、誰にも退けを取るような女性ではなかったが、どうしたことか長年にわたって「物の怪」にとりつかれていたという。

女君、人に劣りたまふべきことなし。人の御本性も、さるやむごとなき父親王のいみじうかしづきたてまつりたまへる、おぼえ世に軽からず、御容貌などもいとようおはしけるを、あやしう執念き御物の怪にわづらひたまひて、この年ごろ人にも似たまはず、うつし心なきをりをり多くものしたまひて、御仲もあくがれてほど経にけれ……

（『真木柱』の巻、三五七頁）

〔現代語訳〕そもそも、北の方は、どなたにも負けをおとりになるようなところはないのである。そのお人柄にしても、ああした高貴の父親王がたいそう大事にご養育になられて世間からも重んじられ、ご器量などもまことにすぐれていらっしやうたのだが、どうしたことか執念深い物の怪にとりつかれておわずらいになり、何年となく常人のようではいらっしやらず、正気を失くされる折がしばしばおありなので、ご夫婦仲もすっかり疎ましいまま久しくなってしまうた……。

北の方は執念深い「物の怪」にとりつかれて、何年となく常人のようではなく、しばしば正気を失くすので、夫婦仲もとうによそよそしい状態になっていったのである。

本性はいと静かに心よく、児めきたまへる人の、時々心あやまりして、人に疎まれぬべきことなん、うちまじりたまひける。
〔真木柱〕の巻、三五八頁

〔現代語訳〕この北の方は、生来ほんとにしとやかで気だてがよく、おっとりしたお方なのだが、ときおり気がおかしくなつて、人に嫌われても仕方がないようなことが、しばしばおありなのであった。

こうした北の方の人物造型は、一体どこから発想されたものであろうか。やはり、その原点には『古事記』の神話が置かれていたものと考えられる。しかし、『古事記』の神話をみてみても、八上比売が「物の怪」に取り憑かれていたとか、正気をなくすることがしばしばあったといった記述は見当たらない。ならば、八上比売はいたって普通の女性だったのかと問われると、必ずしもそうとは言いい切れない面がみえてくる。たとえば、八十神たちに対する八上比売の発言である。大國主の兄弟八十神たちが八上比売のもとへ求婚にでかけ、八十神たちから熱烈な求愛を受けた際に、八上比売は次のように発言している。

八上比売、八十神に答へて言ひしく、「吾は、汝等の言を聞かじ。大穴牟遲神に嫁はむ」といひき。

〔古事記〕上巻、七九頁

〔現代語訳〕八上比売は大勢の兄弟の神々に答えて、「私はあなた方のいうことはききません、大穴牟遲神と結婚しません」と言った。

これによれば、八上比売は八十神たちの求婚をにべもなくはねつけただけでなく、一面識もないはずの大國主と結婚することを高らかに宣言しているのである。こうした八上比売の常人とは異なる発言には、いささか戸惑いの念すら禁じえない。西宮一氏は、八上比売について、

因幡国八上郡（島根県八頭郡）に因んだ名。「命・神」をつけないのは巫女的な女性だからである。

〔西宮一民校注『古事記』〕(12)

と述べている。つまり、氏は「命」や「神」と記されていないことを根拠に八上比売を「巫女的な女性」と規定しているのである。ということは、八上比売は単なる普通の女性ではなく、「巫女的」要素を持ち備えた女性だった可能性が高いのではないか。

こうした「巫女的」要素は、八上比売だけでなく素戔にも窺い知ることができる。

八十神たちによる（八上比売求婚譚）の最中、苦しんでいるところを救ってくれた大國主神に向かって、素戔は次のように発言している。

其の菟、大穴牟遲神に白ししく、「此の八十神は、必ず八上比売を得じ。袋を負へども、汝が命獲む」とまをしき。

〔古事記〕上巻、七九頁

〔現代語訳〕この兎が大穴牟遲神に「あの大勢の兄弟の神々は、きつと八上比売を手に入れることはできないでしょう。袋を背負ってはいても、あなた様が手に入れるでしょう」と申した。

これによれば、稲羽の素兎はあたかも八上比売の意向を踏まえたかのように、大国主神が八上比売と結ばれる運命にあることを的確に予言していることがわかる。この素兎について、西宮一民氏は次のように述べている。

この素兎は、実は巫女八上比売の神使いであった。

（西宮一民校注『古事記』）（13）

つまり、氏は、八上比売を稲羽の素兎を眷属とする「巫女」とみているのだ。少なくとも八上比売は「巫女」あるいは靈感の強い「巫女的」女性だったとみてよいのではないか。

ということは、『源氏物語』の作者は、八上比売のこうした常人とは異なる「巫女的」性格に想を得たうえで、「物の怪」に取りつかれ、精神が異常に高ぶって、しばしば正気を失くしてしまうという北の方の特異な人物像を造型したのではなからうか。

すなわち、いずれの妻も常人とは異なる精神状態にあった点で、八上比売は鬚黒北の方のモデルであったということができるのである。

七 火難との遭遇

⑤ 男主人公がいずれも突然の火難に遭遇している点。

さて、これまで述べてきたように、『源氏物語』に登場する

玉鬘が『古事記』神話における須勢理毘売をモデルとし、鬚黒大將が大国主神、そして鬚黒北の方が稲羽の八上比売を基本的なモデルとして人物造型されていたことが理解されるであろう。しかしながら、『源氏物語』が『古事記』の神話に基づいて書かれたということはそうした人物造型だけにとどまるものではなく、そこで起きる事件からもまた窺い知ることができるのではないか。その一つが、いずれの男主人公もまた突然の火難に遭遇している点である。

玉鬘と結ばれた鬚黒大將は、一日も早く玉鬘を自邸に迎え取ろうと画策し、邸内を整えては玉鬘を迎える準備に余念がなかった。執念深い物の怪にとりつかれ、しばしば正気を失くすことのある北の方は、何年となく常人のようではいられず、夫婦仲もすっかりよそよそしいものになってしまっていたものの、内心それを気の毒に思う鬚黒はあれこれとだめ、同居の説得を試みるのだが、心の隔たりを埋めることは容易に出来なかった。

その夜、雪が盛んに降るさまを目の当たりにしながら、玉鬘のもとへ出かけたのは山々だがどうしたものかと逡巡していた鬚黒は、北の方に促されるままに出かけるための身支度に取りかかった。香炉を取り寄せて鬚黒の装束に香をたきしめさせるなど、かいがいしく手伝う北の方のいじらしい姿をみていると、鬚黒もさすがに不憫に思われ、玉鬘にばかりすっかり執心している自分の不実をあらためて痛感せずにはいられなくなった。するとこの時、決定的な事件が起きてしまふ。

正身はいみじう思ひしづめてらうたげに寄り臥したまへり、と見るほどに、にはかに起き上がりて、大きな籠

の下なりつる火取をとり寄せて、殿の背後に寄りて、さと沃かけたまふほど、人のやや見あふるほどもなう、あさましきに、あきれてものしたまふ。さるこまかなる灰の目鼻にも入りて、おほほれてものもおほえず。払ひ棄てたまへど、立ち満ちたれば、御衣ども脱ぎたまひつ。

〔源氏物語〕「真木柱」の巻、三六五頁

〔現代語訳〕当の北の方はじつと思いを静めて、いかにもいじらしく脇息に寄り臥していらつしやる、とみるや、にわかにつき上がって、大きな伏籠の下にあつた香炉を取り寄せて大将の後ろにまわり、さつと灰をお浴びせになる、その間のことは人々のよく見届ける暇もない一瞬のことなので、大将は驚きのあまり呆然としていらつしやる。あの細かな灰が、目にも鼻にも入って、ほんやりと何も見分けられはしない。灰をお払いのけになるけれども、あたりに立ちこめているので、せつかくのお召物を何枚もお脱ぎ捨てになつた。

北の方が、突然、火の点いた香炉の灰を鬚黒大将に浴びせかけたのである。それによつて鬚黒はどこもかしこも灰だらけといった状態で、装束は焼け焦げ、結局玉鬘のもとへ出かけることは断念せざるを得なくなつたのであつた。

鬚黒大将は突然の火難（火取事件）に遭遇したのである。〔玉鬘求婚譚〕の中でもきわめて特異なこの事件は何に基ついて着想されたのであろうか。

実は、男主人公が突然火による災難に遭遇するという設定は、『古事記』の神話と無関係ではないと思われる。それといふのも、『古事記』の神話をみてみると、鬚黒のモデルとなつた大国主もまた突然の火難に遭遇しているからである。

大国主の兄弟八十神たちは、八上比売から結婚を断わられ

ただけでなく、大国主と結婚すると聞かされたために逆上し、あとからやつて来る大国主を無き者にしようとして結託する。その策略の一つに火難がある。

大国主が伯耆の国にさしかかったところ、八十神たちは「この山には赤い猪がいる。われわれが一緒に追いかけて下りるから、お前が待ち受けて捕まえよ」と命じ、猪に似た大きな石を火で焼いて、それを大国主めがけて転がり落としたのである。そのため、大国主はその石をかかえたまま焼け死んでしまった。

だが、大国主が遭遇した火難はこれだけにとどまらなかつた。さらに、決定的な火難が大国主を襲つたのである。

八十神たちのすさまじい迫害から身を守るため根之堅州国へ逃れることとなつた大国主は、今度は須佐之男命からさまざまな試練を課されることになる。その最大のものが火攻めであつた。

須佐之男命から野に放つた鏑矢を持ち帰るように命ぜられた大国主は、鏑矢をさがすため大きな野の中に入つていった。すると、卒然野の周囲から火がかけられ、大国主は野焼きによる火攻めに遭つてしまうのである。

鳴鏑を大きい野の中に射入れて、其の矢を採らしめき。故、其の野に入りし時に、即ち火を以て其の野を廻り焼きき。
〔古事記〕上巻「大国主神」、八二頁

〔現代語訳〕須佐之男大神は鳴鏑を大きな野の中に射込んで、その矢を大穴牟遲神に取らせた。それで、その野に大穴牟遲神が入ると、直ちに火でその野の周囲を焼いた。

大国主神は、大野のただ中において突然の火攻めに遭遇し

たのである。

同じ火難とは言うものの、『源氏物語』と『古事記』とでは火難の様相がまったく異なっているため、一見したところでは同列に扱うことは難しいように思われる。しかし、いずれも男主人公が突然の火難に遭遇している点で両者は見事に一致しているということができよう。

ただし、それぞれはいずれも火難を起こした加害者という点では相違している。

『古事記』において火で焼いた石を転がり落としたのは大國主の兄弟八十神たちであり、大野に入った大國主を周囲から火攻めにしたのは須佐之男命である。これに対して、『源氏物語』において香炉の灰を鬚黒大将に浴びせかけたのは鬚黒北の方であって、その主体は八十神、須佐之男命、北の方といずれも異なっている。つまり、火難を起こした加害者という点で『古事記』と『源氏物語』には明らかな相違がみられるのである。

ところが、『源氏物語』をみると、鬚黒に香炉の灰を浴びせかけたのはまぎれもなく北の方であるのに、北の方本人の責任はまったく問われていないことがわかる。

うつし心にてかくしたまふぞと思はば、またかへり見すべくもあらずあさましけれど、例の御物の怪の、人に疎ませんとする事と、御前なる人々もいとほしう見たてまつる。
〔『源氏物語』「真木柱」の巻、三六六頁〕

〔現代語訳〕これが正気でこんなことをなさるのだと思うのだったら、二度と振り向く気にもなれまいくらい、あきれほかはないのだけれども、例によって御物の怪が人に愛想

づかしをさせようとするわざなのだと思うと、おそばにお仕えする女房たちもおいたわしく存じあげている。

これによれば、夫のからだに火の点いた香炉の灰を浴びせかけるという大事件を起こしておきながら、この時の火難は正気を失った北の方が、「物の怪」に取り憑かれてしかした乱心であるとして、結局のところ北の方個人の責任は問われていないのである。

これについて、玉上琢彌氏は次のように述べている。

これも「物怪」のせいである、と、大将は思い、女房は思う。／物の怪は、思いもかけないことをする。物の怪のせいではなかったら、こんな女を二度と訪う男はないであろう。それほどに男は嫌うであろう。しかし、さように嫌わすために、物の怪がこうするのである。／罪は物の怪にある。北の方も被害者なのだ。そう思うから、ここにいる一同が、北の方を「いとほし」と見るのである。

（玉上琢彌『源氏物語評釈』第六卷）⁽¹⁴⁾

これによれば、氏は（火取事件）の罪は「物の怪」にこそあって、北の方にはなく、北の方はむしろ「被害者」だというのである。無論、この事件がきっかけとなって、北の方に対する鬚黒の嫌悪感が決定的となったのは事実であるが、『源氏物語』では、あくまでも北の方本人の責任は不問に付されているのである。

ということは、火難の加害者が相違しているのはなぜかといった詮索にはあまり意味がないことを示唆しているのではないか。

実際、火難の被害者という点において『源氏物語』と『古事

『記』は一致している。しかも、それだけでなく、それぞれの火難は動機においても一致がみられるのである。

八十神たちが火の点いた石を転がり落としたのは、大国主に八上比売を奪われてしまうという嫉妬からであり、須佐之男命が野焼きによる火攻めに遭わせたのも大国主に娘を奪われてしまうという嫉妬からであり、北の方が火の点いた香炉の灰を浴びせかけたのも鬚黒を玉鬘に奪われてしまうという嫉妬からで、その動機はいずれも同じである。

すなわち、『源氏物語』と『古事記』の火難は実際の様相こそ異なるものの、火難を受けた被害者、さらには火難を起すに至った動機において見事に一致しているということができるのである。

ということとは、『源氏物語』において鬚黒大将が突然の火難に遭遇するという（火取事件）の発想の原点には、大国主神が突然火難に遭遇するという『古事記』の神話があつたとみてよいのではなからうか。

注

- (1) 金田元彦「常夏・篝火・野分・行幸・藤袴・真木柱」『源氏物語講座』第三卷、有精堂、一九七一年。「玉鬘の論——常夏・篝火・野分・行幸・藤袴・真木柱——」『源氏物語私記』風間書房、一九八九年、一五九頁。
- (2) 本居宣長『古事記伝』九之卷、神代七之卷（『本居宣長全集』第九卷、筑摩書房、一九六八年、四二二頁。）
- (3) 『時代別国語大辞典』上代編、三省堂、一九六七年、三五二頁。
- (4) 『古語大辞典』、小学館、一九八三年、七五八頁。

- (5) 『日本国語大辞典』第二版、第六卷、小学館、二〇〇一年、六〇五頁。
- (6) 『古語大辞典』、小学館、一九八三年、七六〇頁。
- (7) 『日本国語大辞典』第二版、第六卷、小学館、二〇〇一年、六一五頁。
- (8) 倉野憲司『古事記全註釈』第三卷、上巻篇（中）、三省堂、一九七六年、一七六頁。
- (9) 西宮一民校注『古事記』（新潮日本古典集成）、新潮社、一九七九年、三七六頁。
- (10) 鎌田正・米山寅太郎『大漢語林』大修館書店、一九九二年、一五九一頁。
- (11) 『日本国語大辞典』第二版、第二卷、小学館、二〇〇一年、五〇四頁。
- (12) 西宮一民校注『古事記』（新潮日本古典集成）、新潮社、一九七九年、五八頁、頭注。
- (13) 西宮一民校注『古事記』（新潮日本古典集成）、新潮社、一九七九年、六〇頁、頭注。
- (14) 玉上琢彌『源氏物語評釈』第六卷、角川書店、一九六六年、二二七—二二八頁。

『源氏物語』の所謂〈玉鬘十帖〉は、玉鬘を中心に六条院を舞台として繰り広げられる〈玉鬘求婚譚〉を本旨としている。〈玉鬘十帖〉の掉尾を飾る「真木柱」の巻には、鬘黒大将が光源氏の目を盗んで玉鬘を自邸へと連れ去る〈六条院逃走の物語〉が描かれている。

これまでに私は、『源氏物語』の根底には〈日本神話〉が深く関与し、『源氏物語』は〈日本神話〉を源泉として執筆されたのではないかと考えてきた。もしもその発想に基づくならば、六条院を舞台とする〈玉鬘十帖〉の結末にも、その根底に〈日本神話〉が踏まえられている可能性が高いのではないか。

そこで、ここでは『源氏物語』の中から玉鬘と鬘黒大将との関わりを中心に取り上げ、鬘黒大将による〈六条院逃走の物語〉が、『古事記』の大国主神による〈根之堅州国逃走の神話〉を源泉として造型されたことを明らかにしてみたいと思う。

玉鬘をめぐる『源氏物語』と『古事記』との共通点について以下論述する。

- ③ 男主人公の容姿がいずれも並以上なのに、特異な容姿として扱われている点。
- ④ 男主人公にはいずれにもすでに妻子があり、その妻が常人とは異なる精神状態にある点。
- ⑤ 男主人公がいずれも突然の火難に遭遇している点。